

安藤 敏也

- ・僕は当時小学生で、教室で帰りの会をしていました。大きな地鳴りと同時に激しく床が揺れ、机の下に隠れ、机の脚を精一杯つかんでいました。この時の光景は今でも鮮明に覚えています。地震がおさまり、先生の指示で校庭に出ました。そうすると地元の人々が続々と学校に避難してきました。
- ・しばらくすると母が祖母を車に乗せ一緒に学校に避難してきました。その10分後くらいに津波が来ました。津波は防波堤を超えて学校にも到達しそうな勢いでした。校庭では危険なので、校舎の2階にあがり、窓から海のほうを見ると、今まであった家々がなくなり、海一面となっていました。何とも言えない景色が広がっていました。
- ・何日か経ち、母の実家に避難することとなりました。ここにいる仲間とは離れて生活することとなり、別の中学校に入学しました。5か月後、牡鹿に仮設住宅が建ったことで、元の仲間と一緒に学校生活を送れるようになりました。
- ・仮設住宅の暮らしはあまり居心地のいいものではありません。ですが、狭いせいか家族との会話が増え前よりも家族が仲良くなっています。
- ・あれから3年経ちますが、まだ、復興には時間がかかります。中学生ができることは限られていますが、ソーランを踊ることで地域の人々を笑顔にしたいと思います。こんな小さな事しかできませんが、中学生として復興にかかわっていきたいと思います。